

日本道德教育学会神奈川支部

オンライン道德フォーラム2021

令和3年4月24日（土）、いまだ収束の兆しを見せないコロナ禍のもと、神奈川支部主催の道德フォーラムがオンライン形式にて敢行されました。実践発表に留まらず、多くの意見が交換・共有される貴重な4時間となりました。

I 支部テーマ提案（大和市立下福田小学校 小倉健太郎 先生）

支部テーマ：道德科の指導と評価の一体化を目指して
～一人一人の生き方を励まし、勇気づける授業づくり～

昨年度に引き続き、「指導と評価の一体化」が重要なテーマとなっている。多くの教員が苦勞している道德化の評価であるが、扱いを工夫することで教師の授業力向上にも大きく貢献できる可能性がある。また、昨年度までとの違いとして、新たに「一人一人」という文言を追加し、個々の子どもへ着目することを明確に示した。

中教審答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」にもあるように、新しい時代を担っていく子どもたちの教育に際し、個別最適な学びの視点が重要である。学ぶべき価値を単に押し付けるような授業ではなく、学びが多様な個々に帰着するような授業を展開していくことが求められる。そのためには、授業構成を子どもたちの具体的な姿と照らし合わせていく必要がある。明確な視点を持って子どもの姿を検証し、理論と実践を往還しながら一人一人の子どもの学びを見取っていく。



▲本フォーラムのフライヤー

II 研究実践発表「私の道德科授業」

(1) 提案① 田屋裕貴 先生（相模原市立横山小学校教諭）「学級経営+授業=生活から心を豊かに育む」

① 道德環境づくり（学級経営）

日常生活における小さな感動の積み重ねが子どもたちの心を育む。したがって、日常における「おー！」の声を取りこぼさないために独自の道德ノートを活用する。また、日常に道德の視点を持ち、授業前後の流れを意識する。教師の指定ではなく、偶発的な気付きや感動を大切にしたい。

② 教材との出会い

教材を読む際に、心を寄せやすい、考えたいような場面、すなわち子どもたちの感動をハズさないように教材の扱いを工夫する。素直な読みを通して感じる子どもたちの心の動きをつかむ。

③ 展開・発問・板書

導入：共感を大切にする、価値に触れさせる、内容に興味をもたせる。

展開：価値について語りたくなることを意識する。（話すこと≠語ること）

発問：感動に迫る問い、価値を深める問い、自然と考えたい問いを子どもたちが自力でつくっていきけるようにする。

板書：全員参加の意識。本時に考える内容を明記し、活動内容が常に分かるようにする、終末の振り返りを意識する。



▲田屋裕貴 先生

④ 授業外の姿

道徳科授業の重要性は明らかではあるが、子どもたちの心が育まれるのは生活場面の中におけるものが中心なのではないか。したがって、授業前の生活を踏まえた授業内での深化、あるいは授業から授業後への流れを持たせるような手立てが求められる。土台としての授業だけでなく、それを彩るものとして、自分の心について書き留める活動を行う。

(2) 提案② 吉田雄一 先生（綾瀬市立綾西小学校教諭）

① 子どもと創る授業

子どもは大人のを考えを飛び越える。だからこそ、大人でも回答に悩むような問いを投げかける。その上で、一見ずれているように思える子どもの意見を簡単に否定せず、まず「なんで？」と問いかける。これらの工夫によって、子どもの側から本質を教えてくれる展開になる。

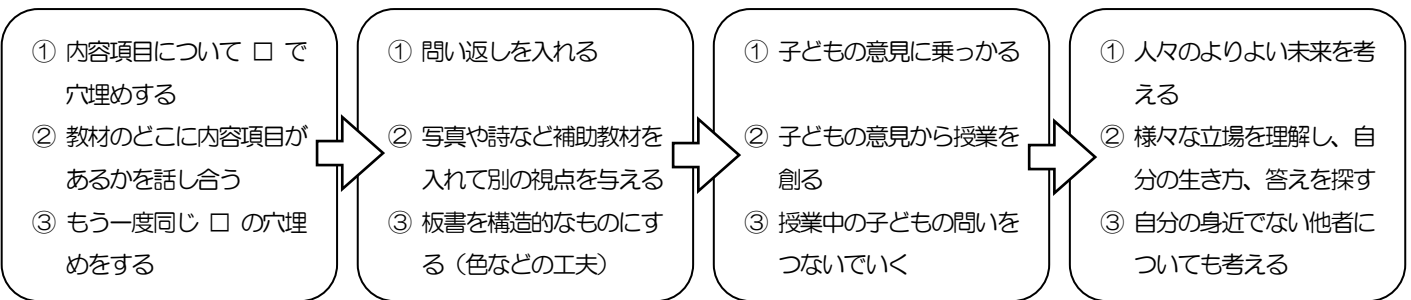


▲吉田雄一 先生

② 子どもの考えを揺さぶる教師の手立ての一例

- (i) 極端な質問をする (ii) お話の条件を変えてみる (iii) 別の立場で考える

③ 私が今まで試行してきた道徳の授業とその変容



Ⅲ シンポジウム「これからの道徳教育充実の方略を語る」

(1) 登壇者① 本田正道 先生（日本道徳教育学会評議員）

① 児童・生徒理解（実態把握）の充実

道徳教育や道徳科において最も重要なことは、児童・生徒理解（実態把握）の充実である。道徳科の役割は、教材を通じた道徳的価値への気づきや理解に照らして、現状の自分の生き方を「みつめる」時間を提供することである。すなわち、「知」と「行」のズレやその原因を理解することが教師には求められる。

実態把握に際し、学習指導要領解説「特別の教科 道徳編」、特に（1）内容項目の概要、（2）指導の要点が重要であるが、その具体的な方法について提案する。実態把握の初期段階にあたるものが「行為面を見る（観る）」ことである。指導



▲本田正道 先生

の要点と照らし合わせながら、できていること／できていないことを観察する。次に、「意識を診る（探る・理解する）」ことが求められる。なぜ児童・生徒が当該行為をしているのかを診断し、理解する。これを怠ることは、「知」と「行」のズレを放置することにつながる。そして、子どもの学びを生み出す授業につなげるために、「指導の方向性を看る」こと（手立ての構築）が重要である。教材分析を行い、新たな道徳的価値へ導くための手立てを構築していく。

様々な授業を参観してきたが、児童・生徒の実態把握が不十分な指導案が多い。例えば、児童の実態を書くべきところで記述が行為面のみに限られているものは、意識や指導の方向性が曖昧になり、授業構築を困難なものにしかねない。

② 道徳科での学習履歴（スタディ・ログ）の活用

「継続的」をキーワードとし、ICTを活用した道徳ノートが機能するのではないか。ノートのような学習履歴は、道徳科授業のみならず、日常生活における自分自身を見つめるための道具になる。したがって、児童・生徒の学習評価は自己評価能力の育成につながるといえる。

(2) 登壇者② 富岡栄 先生（麗澤大学大学院教授）

Q1. 道徳科は補充、深化、統合の時間になっているのだろうか？

Q2. 道徳科と各教科等が双方向であることを考えると、各教科等で道徳性を育むことに努めているだろうか？

教育活動全体における道徳教育、その要として道徳科は機能しているのだろうか。様々な葛藤の中で多くの実践が積み上げられてきたが、道徳科の充実を図るために



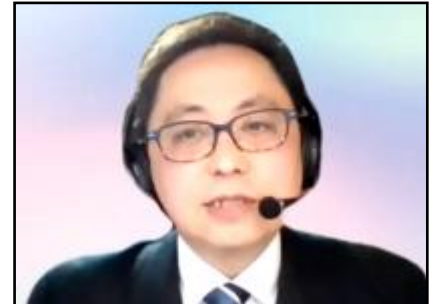
▲富岡栄 先生

は、問いや問い返しが重要である（参考：勝部真長氏の実践）。

そして、「指導と評価の一体化」に際し、道徳科の充実のためには評価に関する知識・理解が欠かせない。ひとくちに「評価」といっても、例えば英単語では measurement, evaluation, assessment, appreciation など複数の語が挙げられる。その中で appreciation は、個人としての子どもが持つものを評価し、それをさらに伸ばしていくための環境を整えていく営みである。道徳科で行なっていくべきは、単なる measurement ではなく、この appreciation である。道徳性の涵養を目的としたときに、いかに評価が道徳性を伸ばしていけるのかが重要になる。また、道徳教育が教科教育学として定立するためには、量的な評価のみならず、質的な評価の導入も検証していく必要がある。

(3) 登壇者③ 大矢敏克 先生（川崎市立日吉小学校教頭）

なぜ道徳科が必要であるか。多様な価値観が共存する予測困難な時代において、子どもたちは画一的な正解を与えられることなく、ふさわしい判断をしていかなければならない。その際に、家庭では育みきれない、判断の拠り所となる自分の考えや思いを育てるために道徳科における集団の中での学びや協働的な学びが必要となる。



▲大矢敏克 先生

① 内容項目についての広く深い理解、コーディネート力

学級に所属する約 40 人もの児童・生徒の思考を上手く生かすためには、内容項目についての広く深い理解をもとに彼らの多様な意見を系統的に分類したり整理したりした上で、論点を明確にして話し合いを進めることが求められる。

② 幅広い共感力

道徳科が子どもの味方であるためにも、子どもの意見を簡単に否定せず、幅広く敏感に共感する感覚を持っていないといけない。子どもの特性や考え方を踏まえて、発言の奥底にある思いや考えを汲み取る。

③ ギガ構想活用

多くのメリットがある。（例：子どもの意見を瞬時に集約できる、それぞれの意見を一覧で見渡せる、1つの文書を複数人で編集できる、記録を整理・分類して保存できる、記録がすぐに取り出せる など）

(4) 登壇者④ 根岸久明 先生（横浜市教育委員会北部学校教育事務所 授業改善支援センター、神奈川大学講師）

① 道徳教育におけるカリキュラム・マネジメント

カリキュラム・マネジメントの考えを生かし循環させることは道徳教育においても機能する。特に道徳教育は、各教科等での取り組みを横断的に、そして各学年での取り組みを縦断的に貫く視点が求められる。また、学校内外の人的・物的資源を効果的に活用しながら、意図的、計画的、組織的、継続的に改善を図っていくことが何よりも重要である。



▲根岸久明 先生

② 旗振りをするリーダーの存在

学校の道徳教育を牽引していくリーダーとして道徳教育推進教師の責任は大きい。学習指導要領に示された役割を果たしていくことが主となる。主幹教諭級の指導力の高い教諭が担当することが望ましい。そして、学校全体を俯瞰して道徳教育が機能するように調整するリーダーとして、校長は教職員に対し教育方針を示さなければならない。

③ 授業の学習内容

学習を、「ねらい+学習内容」に分け、それぞれの関係や分担を明確にする。子どもに直接ねらいを学ばせることは難しい。また、学習活動は学習内容に対応して設定されるものである。これらを構造的に理解することが良い授業実践につながる。研修の場などでも触れられることが望ましい。

活動が制限される中ではありますが、今後の道徳教育、道徳の授業について語れる貴重な機会となりました。また、次回も先生方と一緒に勉強できることを楽しみにしています。

（詳しい内容につきましては神奈川支部ホームページをご覧ください。） <http://www.doutokukanagawa.com/>